

学生による企画展示と合意形成

山内 利秋

はじめに

平成 25 年度の博物館実習のうち、学内で実施される実務実習では企画展示と標本作製を実施した。企画展示については 24 年度より延岡市民協働まちづくりセンターを会場としているが、今年度は宮崎県内沿岸部に生息するアカウミガメをテーマとし、同所での展示を実施した(図 1)。

この実習のスケジュールは下記の通りである。

4/9 博物館実習についての事前指導。1) 学内実習と館園実習について。実習先の決定状況・準備動向の確認。2) 学内実習についての予定・計画。展示企画について。標本作製について。ワークショップを通じて「展示を企画化するとはどういう事なのか」を理解していく。

4/16 企画テーマについてのワークショップ。大まかな工程表を作成する。内容を企画素案としてまとめる。

4/23 企画テーマ内容を各企画書としてまとめていく。役割分担を決め、作業を確認する。1) 資料収集・調査→全員 2) 展示企画・会場設計・制作・設営 3) 広報(ポスターデザイン、各所へのアナウンス、マスコミへの説明等)・会場調整・解説書編集 4) アウトリーチ(教育普及)・アウトリーチ用展示企画詳細な工程表を作成する。

5/7 企画に基づいた準備として、それぞれの役割に応じた準備を開始する。資料収集・調査については全員で実施。広報は展示会場との打ち合わせの準備。

5/14 企画テーマの再調整。資料収集・調査の実施。

5/21 資料収集・調査の実施。

5/28 同上。広報・会場調整・解説書編集の開始会場は延岡市民協働まちづくりセンター 1F ギャラリーを予定。広報はポスター・マスコミ等へのアナウンス・展示アンケート準備。

6/4 資料収集・調査を続けながら展示方法の検討と準備・教育普及活動の計画。展示については導線的设计、パネル・キャプション・展示解説等の作成。教育普及については目的と対象を絞り込んで計画する。



図 1: 展示企画のポスター

6/11 同上。

6/18 同上。

6/25 同上。

7/2 同上。

7/4 高齢者・障害者に対する対応技術学習。

7/6 実習生のラジオ番組への出演。

7/9 会場での準備の実施(ただし、展示会場が火曜日休みのため、前後に日程をずらす場合も)。企画展示の実施(10日程度)。期間中に教育普及(アウトリーチ)活動を行う。

7/16 同上。

7/23 企画終了後の評価・事後指導。

テーマ設定に至るまで

昨年度と同様企画展示テーマを設定するにあたっては、ワークショップを繰り返し実施する事でプロセスの共有化を目指した(写真1ワークショップの様子)。この実習での企画展示では地域社会の諸問題に関係する事を主題としており、最終的には近海に多く沿岸部に産卵するアカウミガメと環境保全の問題を取り上げた。しかし、地域社会の諸問題⇒環境問題⇒具体的なテーマというプロセスを経るに至るまでの期間がゴールデンウィーク後の5/14まで引きずってしまい、テーマを絞り込むまでには昨年度と比較すると時間を要してしまっている。

本授業は4月から7月の約4ヶ月の日程でテーマ設定から展示・企画後評価までを目指しているが、企画から展示開催までは短期間であり、この期間中に実施可能な作業は限られている。また、それだけにテーマの確定が遅れると後々の作業に影響が生じてしまう。そうした条件においては、理想的には実習生は4月の授業実施以前の段階で一定の知識や問題意識を有している事が望まれるのであるが、学生は全般的に地域コミュニティと関与する経験が少なく、従って企画テーマに関わる想像力にも限界があるのは免れない。と、いうよりもこの実習を通じて博物館が地域社会と密接に関係する存在であり、あるいはそこで生じる様々な問題解決にも関与し得るという現代的な役割を彼ら学芸員課程実習生が実践的に理解していく事を目指したい。今回、テーマ設定に至るまでの合意形成プロセスで特に重視したのは、実習生各者の到達点と目標を相互に確認・把握させる事であった。

企画展示のテーマの設定や展示空間のレイアウト設計について、ブレインストーミング型のワークショップを取り入れる事で実習生間の認識や思考プロセスを共有可能とし、合意形成をスムーズに実現化していく事を目指した。実際にこの試みは極めて有効に作用し企画に反映された。

まず学生自身に対するアイスブレイクとして展示を企画するとは一体何をするのかをイメージさせる事からはじめ、動機付けをはかった。これは24年度に実施した内容と同じ下記の設問を活用している。

「企画展のアイデアをトレーニングしてみる。」

1: もし、心の中に一つの博物館の展示空間をあげるとすれば、

1) 私は、○○○を想い描く。

2) その理由は、○○○である。

2: 自分の部屋をレイアウトすると仮定して、よいデザインを満たす条件を考えてみる。

- 1) 客を招いても大丈夫なように、自分の部屋を美しくするには？
- 2) その一方でよりよく自分らしさを表現するにはどうしたらいいのか？
- 3) 機能性・効率性をはかるにはどうしたらいいか？

この動機付けにかかるテーマ設定については、ランドルフ・ヘスターらによる合意形成手法を参考にしている (ヘスター・土肥 1997)。

これら動機付けとなる設問を経た後で、展示テーマ設定へと向った (写真 1)。教員は実習生がテーマを決定するための議論を促す行動をとるが、基本的には実習生の議論の動向を重視しているので、ファシリテーションにおける介入は、この段階では最小限に控えている。合意形成の推進に関しては、主体者である実習生が「何を通じて」・「何を知ってもらいたいのか？」を基本的な問題設定として思考していく方向性を目指している。平成 24 年度の実習は全員で 12 名の参加である事から、テーマ設定のプロセスにおいては 2 つのグループに分かれ、参加した個々人が思い浮かべたキーワードを纏めなおすというオーソドックスなスタイルを採用した (図 2)。

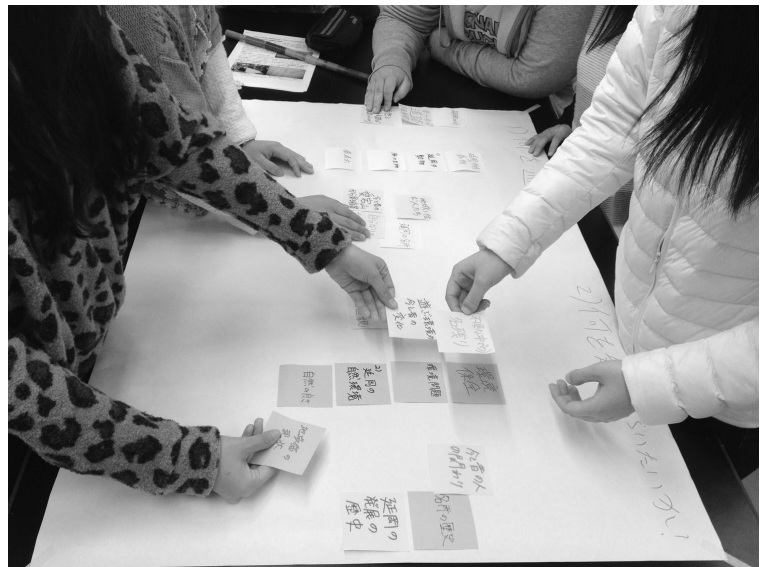


写真 1：展示テーマへ向かうプロセス

1 の段階

最初に 2 つのグループから、手段 (何を通じて) と目的 (何を知ってもらいたいのか) 挙げさせた。

「何を通じて」：過去、人文、発展、自然系、スポット系、生物系

「何を知ってもらいたいのか」：発展、伝統、未来、自然、環境系、今と昔、生物、歴史系

2 の段階

次に 2 つのグループから出た言葉の共通点と相違点を抽出してみる。

1. 共通点

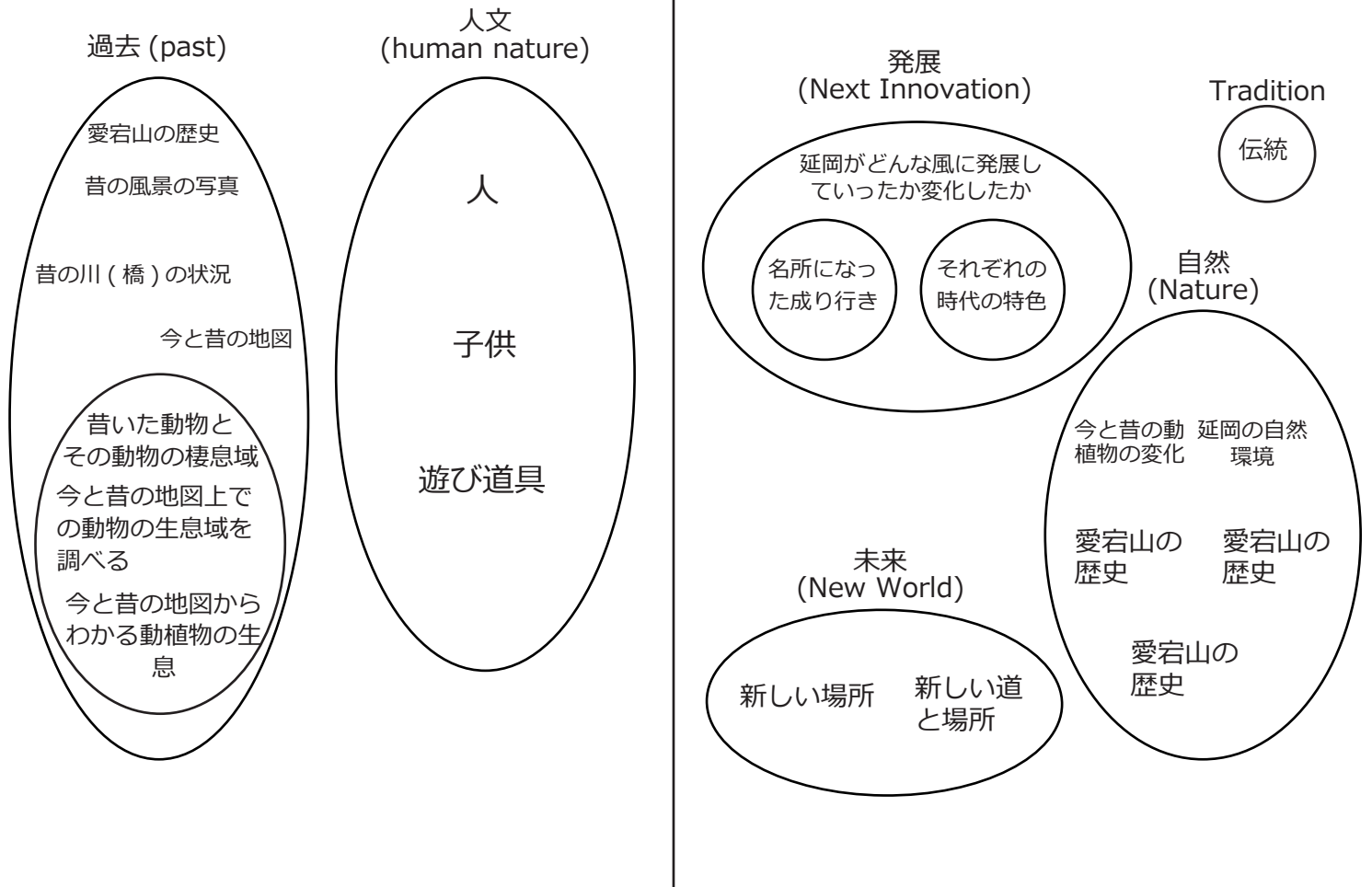
- a. 延岡、愛宕山、自然環境、地域人、場所の写真、モノコトの写真、場所の地図、土地柄
- b. ヒストリー、時の流れ、共生：自然環境の変化、歴史からみる今と未来、発展と環境問題、生活の変化、かわらないもの

2. 相違点

- a. 昔と今の道路→発展、昔と今の動植物→衰退

何を通じて

何を知ってもらいたいのか



何を通じて

何を知ってもらいたいのか

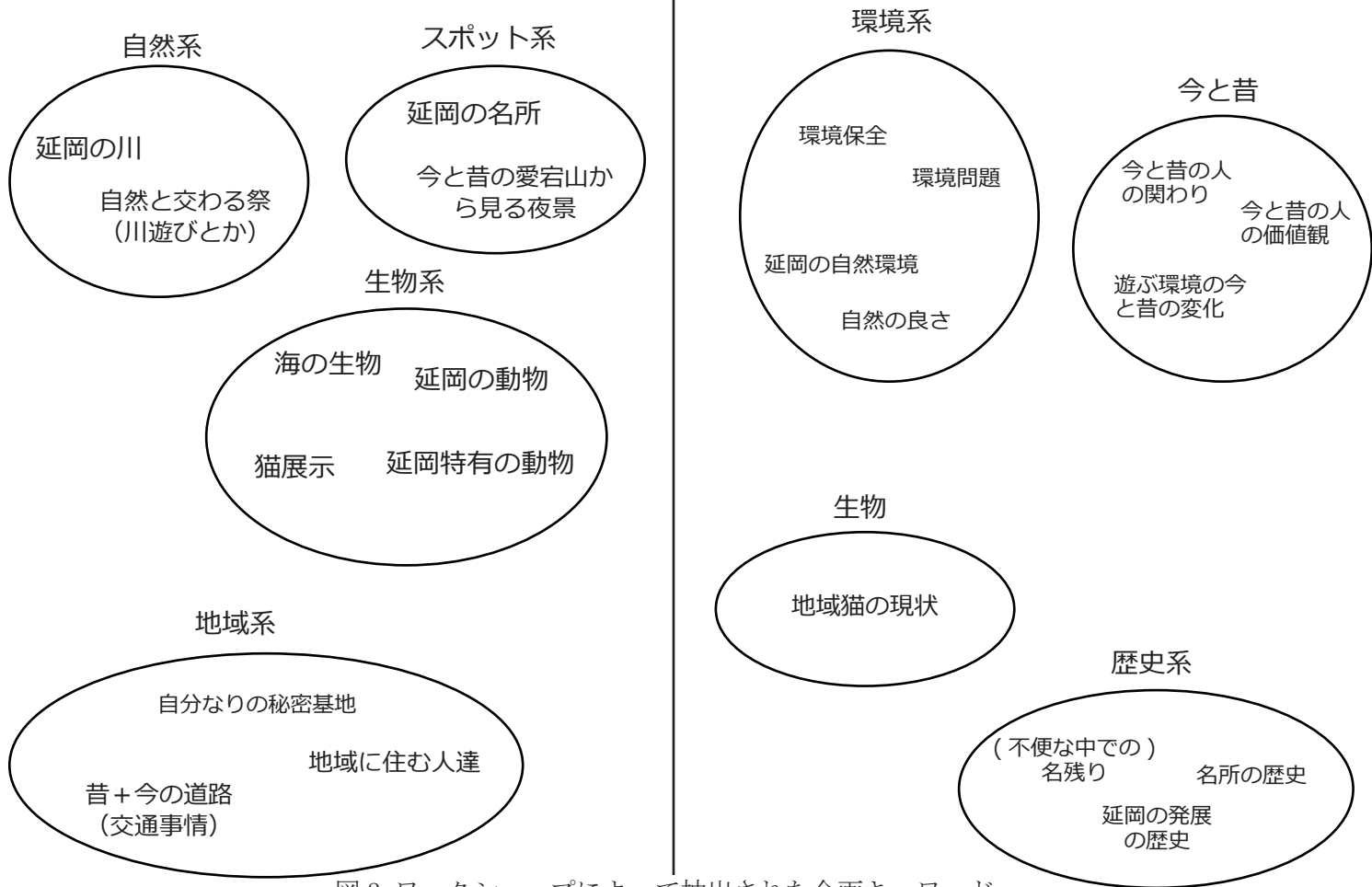


図2 ワークショップによって抽出された企画キーワード

b. 未来と名残り、伝統と環境問題

こうして抽出されたキーワードから、次の段階として企画テーマとして具体化していった所、下記のようないくつかの文章に纏まった。

「延岡を通じて時の流れを知る」「延岡の歴史からみる今と未来」「ライフログ」「あしあと」「自然環境との共生」「人生という冒険」「タイムライン延岡」

さらにここから、下記の主題にすり合わせていく。

「延岡の自然環境と歴史から環境との共生を学ぶ」

「延岡の続いてきた暮らしから未来を考える」

ある程度テーマを搾り出すと、実習生も議論が煮詰まってくる。しかしながらこのままでは抽象性が高すぎてテーマが大きすぎる。大学生が可能な範囲での企画を遂行するには、このテーマを保持したまま、さらに具体的な対象に絞り込んでいく作業が必要となった。

そこで実際に企画の中で何が出来るのかを考えていくという作業を行った。

「未来を造る→参加型」「自然 (ex. アカウミガメ) などは延岡の人々に知ってもらいたい」「遊びと道路→参加型にしやすい」「未来の地図→アカウミガメを加える」「地図を通じてみる延岡の人と自然」

この段階で「地図」と「アカウミガメ」がキーワードとして現れてきた。アカウミガメは延岡をはじめ日向灘に毎年多く回帰・産卵する事で知られており、宮崎県指定の天然記念物でもある。延岡という地方都市の特徴として挙げられるのは街中に工場群が点在し、人々もそれに関わって生きてきた一方で、中心を流れる五ヶ瀬川の優れた水質に象徴されるように、極めて豊かな自然が存在している



写真2：深夜の海岸にやってきたアカウミガメ
(撮影：比嘉優花)

という事に他ならない。そうした自然環境を表徴する資源は他にも多く存在するのだが、特に市民との関係性でよく知られているのはアユと鮎築であろう。鮎築は五ヶ瀬川に複数掛けられるアユの伝統漁法であり、秋の風物詩ともなっている。街中の河川に毎年仕掛けられるものであるから、目にも付きやすい。特に近年は天然アユの減少やコストの増大が問題にもなっており、報道でもよく知られている事からニュースバリューとしては高いものである。

一方でアカウミガメとは別に自然環境とヒトとの関係性を物語る対象としてアカウミガメがいる。宮崎県は、屋久島を抱える鹿児島県に次いでアカウミガメの産卵が多い県であり、県北部の延岡市から県南部の日南市まで、南北に細長い日向灘沿いの海岸に沿って毎年回帰している。このアカウミガメの存在は毎年地元新聞等で紹介されるため、市民にとっては鮎鱒同様風物詩的に知られてはいるものの、産卵が夜間から明け方であるので、実際にその存在を観た事のある人は限られていると考えられる。

市内に大きな工場群が点在しながらも、その工場の一つに隣接した海岸に産卵に来るアカウミガメの存在は、近代以降のこの地が産業化と環境保全を両立させてきた象徴として市民がより深く知る必要がある。

こうした背景が議論の中で生じ、最終的にアカウミガメと、それが来る延岡の海岸を全面に出した『アカウミガメが来るトコロ』というタイトルとなった。

資料調査

実習生は動物生命薬科学科に所属し動物に関して一定の専門的学習は行っているものの、主体は実験動物や伴侶動物に限られるため、野生生物であるアカウミガメについては殆ど知識を有していない。そこで短い期間の中で企画対象となるアカウミガメの実体を理解するにあたっては、天然記念物の保護を行っている延岡市教育委員会文化課と延岡市野生生物研究会からご指導を頂き、また海岸を管理している宮崎県県土整備部延岡土木事務所から産卵場所である長浜海岸周辺の環境保全について説明を受けた。

特に教育委員会文化課からは県内におけるアカウミガメ保護の状況と延岡市内における産卵状況のデータの提供を受けると同時に、長浜海岸における深夜から早朝の産卵時調査において数回に及んで実習生の同行を許可頂けた。この結果実際に実習生がウミガメの産卵を確認し、写真撮影に成功し展示に利用する事が可能となった(写真2・3)。文化課からはさらに写真や映像、実物大のアカウミガメ模型を借用し、展示に活用した(写真4)。

長浜海岸で産卵後、流出の恐れのあるウミガメの卵の保全を行っている野生生物研究会のメンバーからは、カメの生態や活動の課題について実際の現場で教示を得た。特に活動に関わっているメンバーが高齢化している問題は、地域社会の環境保全活動の持続性に大きな影響が出てくる可能性が伺われた。

気候変動や環境の変化はアカウミガメの産卵・回遊にシビアに反映される。例えば被



写真3：朝まで海岸にのこっていたアカウミガメ
(撮影：時松萌理)



写真 4 教育委員会のアカウミガメ模型

害の大きかった平成 17 年の台風 14 号が来襲した翌年には、流出した木材や様々な残骸が海岸に多く打ち上げられたまま残っていたために、産卵数が極端に少なかった。

野生生物研究会は、文化課と協力して侵食の進んだ海岸に産み落とされた卵を満潮時でも波のかからない砂浜のやや陸地側へ移設するという作業を行っているが、この海岸環境の変化に対応しているのが宮崎県の延岡土木事務所である。特に海岸における砂浜の侵食の問題は全国で発生しているが、県内では宮崎市の宮崎海岸にサンドバックを増設し、砂

浜の侵食を食い止めようとする工法が考えられている (鶴崎・真鍋 2012)。

延岡市の場合、産卵の多い長浜海岸では侵食が進行している一方で、そこからやや南にある延岡新港沿岸には砂が堆積している状況がある。そこで堆積した砂を長浜海岸に搬入し、海岸砂丘を造成する等の工事が行われている。

実習生はこうした延岡のアカウミガメをめぐる諸問題を調査し、今回の展示の中に取り入れている。

高齢者・障害者に対する対応、広報活動

昨年度の企画展示では来場者に高齢者・障害者が多かったが、こうした方々への対応を学習していなかった事から、対応に問題点があった。しかしながら博物館にはバリアフリーやユニバーサルデザインへの配慮、広くソーシャル・インクルージョンを担う公共的性格がある事から、本学社会福祉学部臨床福祉学科の介護担当教員の協力を得て高齢者・障害者への対応を体験した。実習生は視野狭窄と白内障及び身体を制限した高齢者疑似体験、あるいはまた、車椅子による移動体験を通じて高齢者や障害者の立場で物事を考え、さらにはそうした来場者に対する対応技術を実際に学習している (写真 5)。習得した技術は限られるものの、様々な立場にある来館者の視点を理解し、この学習活動からそうした点を考えるようになっている。今後はさらにこれら観点を実際の展示にも取り入れられるようにしていきたい。

学生主催の企画では、どうしても疎かになるのが広報活動である。そこで展示企画を多くの方々に知ってもらうために新聞社 (宮崎日日新聞・夕刊デイリー) に連絡し、準備段階と実施時を記事として掲載してもらった。またこれを切っ掛けに実習生がラジオ番組 (MRT ラジオ「超ドッキングラジオ」) へ出演し、企画の意義や活動の詳細をテーマに紹介している。さらに別番組では環境保全をテーマにした点を重視しての展示紹介を行った (MRT ラジオ「エ・コ・コロ カフェ」)。地元ケーブルメディアでも展示を紹介した (写真 6)。

そしてもう一つ、関連グッズの作成は今回の企画での大きな特徴である。これは市内のベーカリー

に依頼してウミガメをモチーフにした「ウミガメパン」をデザインしてもらい、展示期間中、一日10個限定で販売するというものであった。このパンは好評で、毎日早い時間で売り切れる事も多かった(写真7)。こうした企画は今後のアカウミガメの保全活動におけるヒントともなる可能性がある。なおこの売り上げは環境保全団体に寄付している。もう一つ、広報担当の役割として重要なのは会場との交渉である。会場である延岡市民協働まちづくりセンターは利用希望者が多いため、企画期間の確保や企画の説明・用具の貸借といった事は極めて重要な役目でもある。

展示について

展示はパネルを中心としてアカウミガメを通じて工業化と環境保全が両立されてきた延岡のこれまでの振り返りな



写真5 高齢者・障害者への対応技術を学習する

がら、アカウミガメの生態や産卵した卵の様子、さらに現在の問題点に焦点をあてた(写真8)。

特に延岡市教育委員会の制作した等身大のアカウミガメ模型を借用し、これを中心としながら、カメ模型と隣接して産卵後の砂中での卵の状況を再現し、断面から観察出来る等倍の模型も配置した。この模型は板状の発泡スチロールをベースとして中心をくりぬいた上で立方体に組み合わせ、大きさと見た目がほぼ同じピンポン玉を積んで産卵された卵の状態を再現したものである(写真9 砂中での卵の



写真6 ケーブルメディアの取材を受ける実習生



写真7 地元ベーカリーの協力でデザインしたウミガメパン



写真8 展示の様子 (左右上下の順で、8-1: 模型・パネル等の様子、8-2: パネル展示の様子、8-3: ペーパークラフトコーナー、8-4: 完成したペーパークラフト、8-5: 砂浜に産み落とされた卵の模型、8-6: Q&A コーナー)

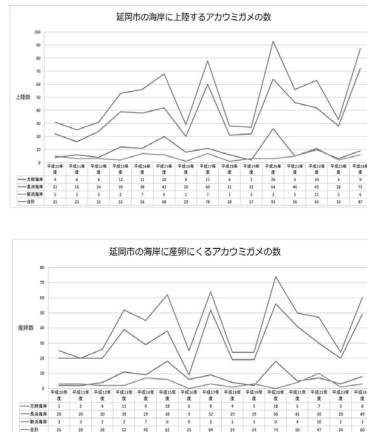
状況の再現模型)。砂地の地表面は模型用のシーナリープラスターを塗布して質感を出し、その上から情景テクスチャーペイントとシーナリーバラストを主に使用し、質感を表現した。

ところでアカウミガメの卵について来場者に最も知らしめたかったのが卵の感触であったが、ハンズオン展示を可能とするために様々な素材について検討した。最終的には圧力をかけた時の反発力が弱いプラスチックボールに、さらその上から切れ目を入れたゴムボールを巻き付ける事で実物に雰囲気を感じる事に成功したので、立方体の全面に透明のプラスチック板を貼り付け、一部を穿孔し、そこから指を差し入れて卵の凹凸具合を体感出来るように工夫している。

また、展示の際にはアカウミガメ模型と卵の模型を低い位置に設置している(写真8-1、8-5)。これは両模型の落下を防止するとともに、実際の海岸砂浜での高さ位置関係に対する理解を促す事を目的

延岡市のいくつかの海岸には
私のお母さんや友達のお母さん
が上陸して卵を産むのよ！

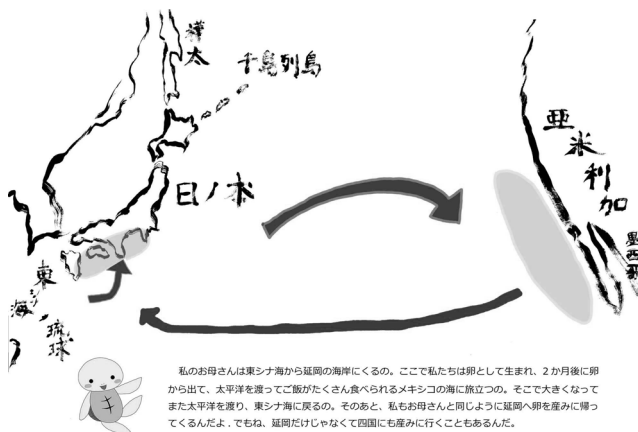
でもね、大きな台風がきたと
きには、砂浜が削れたり、ゴミ
が溜まるから砂浜に上がりにく
くなるんだ。



アカウミガメの Q&Aコーナー

答えだと思ふ貝がらを
めくってみよう！

せいまい もんだい
正解の貝がらには問題と
同じ絵が描いてあるよ！



ゴミのポイ捨て

ゴミがあると親ガメ
の産卵や子ガメが海に
向かうときのじゃまに
なってしまうんだ。



図2 展示に使用したパネルの一部(左上から時計回りに、2-1:延岡市内のアカウミガメ上陸・産卵状況、2-2:Q&A コーナーのパネル、2-3:海岸でのゴミ問題の揭示、2-4:アカウミガメの回帰)

とした。これら模型展示は好評で、特に卵の模型は多くの来場者に好感を持たれたが、プラスチックボールではなく、本来は触れるようには造っていないピンポン玉の部分に触ろうとした人も多かった。こうした部分はハンズオン展示の「予期せぬ所」として実習生には理解されたと考えている。

パネルを主体とした展示については実習生自らが撮影した産卵前後のアカウミガメの写真は迫力もあり興味深いものとして理解され、また環境保全の問題を来場者に訴える事が出来た(図2)。また来場者に対する案内も会期当初は不慣れな実習生が多かったが、日を増す毎に対応が向上している。ただし、環境保全へのアプローチについては、若干インパクトに弱い部分がありもう一工夫必要だったかもしれない。例えば宮崎県延岡土木事務所でのインタビューを撮影した映像については、肝心の録音ボリュームが不備であったり、数年毎の長浜海岸での産卵ポイントの分布地図が解りにくい状況であった。

教育普及活動について

海と環境へのアプローチとして、アカウミガメに限らず、海の生物を主眼とした活動を行った。展示会場においては延岡市内の北浦町で入手した貝殻を活用したクイズや様々な貝類を知ってもらうコーナーを設けていた所、展示開催を知った市民から資料提供があり、カジキの吻(ふん)やカニの甲羅、

大型の貝類殻を寄贈して頂いた。これらは会期中来場者が自由に手にとる事が出来るような資料とした(写真9)。またアカウミガメに関しては、組み立てると卵から孵化した際の大きさとなるペーパークラフトを設置した。

そして、会期中の土曜日にワークショップを実施している。このワークショップではツメタガイによって二枚貝の貝殻に穿孔された小さな穴から、海の生態系を学習していく事を目的とし、さらには穿孔された穴を使ってモビール等の装飾品を制作するという活動を



写真9 エducationコーナーの様子

プログラムの実施)。主に小学生を対象としており、伝えるためのメディアとして実習生手製による本展示キャラクターである「かめみん」を主人公にしたストーリーの紙芝居を活用した事は好評であった。このワークショップでは参加者である子供とその親から簡単なアンケートを実施した。ただし子供の参加人数が少ない(6名)ので、評価の正当性を得る事は難しく、また、どうしても単純な感想になってしまうため難しいが、フェイススケール等のヴィジュアルアナログスケール(VAS)を応用する事は可能かもしれない。

企画実施後の点検・評価

1) 来場者はどう評価したか

今回の企画では企画実施期間中の来場者・ワークショップ参加者による評価と、複数の段階での内



写真10 教育プログラムの実施
(左から 10-1: 紙芝居の実施、10-2: モビールの制作)

部評価を実施している。

来場者による評価は次に挙げる。

- ・延岡に来て、こんな素晴らしい環境であることに感動を覚えました。(60代男性)
- ・努力の成果が出ています。ありがとう！7月10日現在、30頭の上陸産卵。(T.K カメ調査員)
- ・写真の撮影日を付けた方がいいと思います。アカウミガメのキャラクターの名前があるといいですね。その年の産卵場所を示すシールが全部同じ大きさの方が良いと思います。(24年度が凄く多く見える。)その他、いろいろ工夫されていて気持ちの良い展示会でした。(40代女性)
- ・見やすくわかりやすい。カメのペーパークラフトなどおもしろい。(30代女性)
- ・人が見逃しがちな小さな小さなことに目を向けた地道な等身大の企画で、大変わかりやすかったです。これからも大きなことを考えず、地道にやるのが大切だと思います。頑張ってください!!(50代男性)
- ・実際の卵の柔らかさに驚きました。延岡に住んでいますが、アカウミガメを見たことがないので、一度見てみたいと思いました。(40代女性)
- ・クイズがおもしろかった。もう少しクイズしたかったです。(30代女性)
- ・かめみんなかわいいです。延岡に住む者として、大切な自然をもっと知らなければならぬと感じさせられました。(40代女性)
- ・女性らしく、かわいらしく、見やすい展示だったと思います。もっとじっくり見たかったです。これからはがんばってください。カメ好きなので、企画うれしかったです(笑) (30代女性)
- ・ウミガメの保護を通して、多くの市民が環境を大切にすることを育てることにつながってほしいですね。50年前に門川の向ヶ浜にアカウミガメが産卵していたことを懐かしく思い出しました。ありがとうございました。(60代男性)
- ・とても気持ちの良い対応をしていただきました。ありがとうございます。それぞれの道があるかとは思いますが、応援しています。(20代男性)
- ・少し展示が少ないかな。(40代男性)
- ・1) 展示している写真に名前を書いて掲示してください。2) 蛭の写真は北川なのか？五ヶ瀬川付近なのかわからなかった。3) 長浜の砂浜全体にアカウミガメが産卵に来ているのを知りました。4) 延岡人として長浜のゴミ拾いをしなければと思いました。 どうもありがとうございます。メル友にこの企画をPRします。(60代男性)
- ・延岡の名物のPRをしっかりとってください。継続的なイベントにしてください。(70代以上男性)
- ・一度は体験してみたい(産む様子、孵化して海に行く様子)。どのような条件のときに上陸するのかな。タグを何回も付けられたら、カメの行動範囲がわかるのかな(カメに負担に掛からない範囲で)。この活動を通して、延岡の良さ(きれいとか広い浜辺とか)をPRして活性化につながれたら良いなと思う。九保さん、頑張ってくださいね。(70代以上男性)
- ・ウミガメの産卵を見に行ってみたいと思いました。(30代女性)
- ・延岡は昔から、アカウミガメが有名だったのでいいと思います。私(74歳)は子どもの頃(1950年前後)長浜の近くに住んでいたのも、実際卵を産むところを見たり、卵を取って食べたりしていました。一夏に何回も卵を取って食べました。今と違ってそれが当たり前だったのです。(70代以上男性)
- ・以前からカメには興味があり、テレビなどではよくウミガメ上陸の話題などは録画して見ていました。子ガメが無事育って帰ってくると良いです。ペーパークラフト楽しかったです。配色を考えてくれば良

かったです。ありがとうございました。(50代女性)

- ・延岡にウミガメが来るのを知らなかったの、知ることができてよかった。うみがめばん、かわいかった。早く食べたい。ウミガメ～(20代女性)
- ・小さい子ども連れで来て、一緒に見る事が出来るか不安でしたが、楽しんで企画を見ることができて良かったです。今後も企画を楽しみにしております。頑張ってください。(30代女性)
- ・楽しかったです。(20代女性)
- ・延岡にアカウミガメのことが細かく調べられていて、わかりやすくおもしろかったです。(30代男性)
- ・初めて見ました。これからがんばってください。(40代女性)
- ・わかりやすい展示で勉強になりました。自然保護の大切さを感じました。実物は素晴らしく初見参りました。(70代以上男性)
- ・もう少しパネルの枚数があればいいなと思いました。(20代女性)
- ・詳しく調べてあり、わかりやすく書かれていました。良かったです。(30代男性)
- ・いろいろ工夫していて、とても良かったです。写真のパネルに少しコメントがあるといいかなと思いました。今後は何か引き続き、取り組みしていくことがあるんですか？全体的にまとまっていてわかりやすかったです。時間はあったら、ペーパークラフトをやってみたかったです。お疲れさまでした。(50代女性)
- ・学芸員の卵のみなさんで何度も現地調査をしたり、資料を確認して、素晴らしい展示をしていると思いました。大変良いことだと思います。御苦労さまでした。現在世界中、様々な絶滅危惧種となる動物が消えている状況であり、今回のテーマとして取り組んだアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイを含め、生存数が減っています。つい最近のラジオでも、言われていましたが、三種類のカメはそれぞれ独立して、種族保存と進化をしてきましたが、最近の調査でアカウミガメとタイマイの交配による新たなカメが生存していることがわかっているそうです。それほどカメの世界でも生存競争が厳しいということだと思います。これからも素晴らしい研究を継続して、動物たちのより良い環境作りに貢献してください。写真がもう少し多くあれば、さらに良いものになったと思いました。(40代男性)
- ・延岡にこれほどアカウミガメが産卵に来ることを知らなかったです。ペーパークラフトかわいいですね。学生さんの解説が良かったです。(30代男性)
- ・展示の内容が多彩でした。自分たちで土木事務所、学校へ出向き、調査したことも踏まえ、内容やアウトリーチプログラムが決まっていたことがわかりました。学生のみなさまのギャラリートークもわかりやすく、とっても好感が持てました。(50代男性)
- ・自然、生物を守る事の大切さを理解できた。未永くアカウミガメが上陸、産卵できる環境を保護していきたい(運動に参加したい)。(50代不明)
- ・楽しませていただきました。次回はぜひ、浜での活動風景も見させていただきたいです。(30代女性)
- ・展示内容はよく検討され、模型などおもしろくわかりやすい。今回をきっかけとして、また何か第二のものを期待しています。(40代男性)
- ・自然を守る大切さを伝えてください。私もがんばります。(60代男性)
- ・天然記念物(国指定)の情報も展示に欲しかった。生物学的な解説がほしかった。グラフの出どころの記載が欲しかった。(50代男性)
- ・対応してくださった学生さんがとても親切に対応してくださいました。大変勉強になりました。(40

代男性)

- 内容が良くまとまっていて、わかりやすくスムーズに見ることができました。展示の見せ方も非常におもしろく、全年齢年代が興味を持てる内容に作られていると思います。絵合わせや卵の模型等は特に良いアイデアだと思います。スタッフのみなさん、お疲れさまでした。ありがとうございました。(30代男性)
- とても楽しくお話を聞かせてもらいました。ぜひ、長浜に出掛けてアカウミガメを見たいと思います。ありがとうございました。(40代女性)
- 延岡に住んでいながら、気候の特徴、自然環境などを明確に知らないことを気付かされました。ありがたいです。(20代女性)
- 延岡でアカウミガメが見られるなんて知らなかったです！展示、わかりやすかったです！！みなさん、実習頑張ってくださいね。(20代女性)

このように来場者の評価は基本的に好意的だが、中には次回の展示につながる重要な指摘もされていた。一方、例えばあえて市内の景観を撮影した写真のキャプションを書かなかった意図を展示からは理解してもらえなかったりする等、課題も明らかになった。

2) 実習生は自らをどう評価したか

まず実習生は、博物館実習の毎回の授業終了時にその時間での自己評価と、次の授業での目標設定を行っている。そして翌週の授業の冒頭に前の週の自分自身の自己評価と他の実習生の自己評価(これらは無記名のかたちで公開)を確認して、実習に向き合えるようにした。これは展示準備が佳境に入るまで実施している。これは毎回の自己の到達目標を明確にするのと、前の時間までの成果を振り返って再確認する事で、その時間までに実習生自身が「自分が何をなすべきか」を明確化していく上で有効であったと考えられる。

次に展示品等の制作時においては、広報・企画・展示(ジオラマ担当とパネル担当の2班)、教育普及の各4班がそれぞれ実施している作業を、自分以外の班を相互に評価していく事で、視点の複数化や修正を行っていった。

そして企画展示終了後には、これまでの活動を振り返る自己評価のワークショップを実施した。ここでは、最初に各実習生が所属する班単位での評価を行っている(表1~4)。各班によって視点は様々だが、企画段階から調査・制作時、実際の展示期間中といった時間的経過の中での評価や、グループ内でさらに分担した役割単位での評価が行われている。さらに次の段階では、各自の所属班以外に対する評価を実施した。こうした重層性を持った相互的な評価を行う事で、様々な立場に立脚したものの見方・考え方の存在を把握し、これを理解していったのである。

結語

本平成25年度は、昨平成24年度に比べ実習生が倍増(5人→12人)しており、当初は企画も規模を大きくしたものが可能ではないかと考えたが、むしろ人数が増えた事で合意形成が難しくなり、テーマ設定が遅れてしまった。また大学生の集団活動ではよく見られる、より積極的に活動を担う者と追従的に行動する者の差があった。しかしながらこうした問題点も展示準備が進行した事で実習生個々

表1 広報班の自己評価

①デザイン系	<ul style="list-style-type: none"> ・解説書の作成において伝わりやすい文面・レイアウトを考え、作成。 ・ポスター作成において、デザインの提案や実際にポスターを作成した。 ・かわいいキャラクターを考えられたと思う
②技術習得系	<ul style="list-style-type: none"> ・かめみんを描く際にイラストレーションやフォトショップ、ペンタブの使い方を習得した。
③告知系	<ul style="list-style-type: none"> ・広報としてポスターを多数の箇所に掲示しに行くことができたと思う。 ・FaceBookでできるだけ告知した。
④協力系	<ul style="list-style-type: none"> ・一人よがりにならず、みんなと協力することの大切さを学んだ。 ・自分の担当の班だけではなく、他の班の作業も手伝うことができた。
⑤広報対応系	<ul style="list-style-type: none"> ・メディアの対応において相手の求める情報や自分がアピールしたいポイントを説明すること。 ・広報として外部の人に企画展の説明をする際に、自分の言葉で人に伝えることの難しさを学んだ。
⑥視点の多様系	<ul style="list-style-type: none"> ・企画展開催中、大人だけの視点じゃなくなるべく子供の視点で楽しめるよう工夫した。

何を行えたか	より以上に何を目標せるか
① キャラクターやポスターのデザインができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・展示のポイントになるものを入れるなど、より展示内容に合ったデザインにする。 ・ポスターに地図やアクセスを書くともっと良かった。
②ポスターやキャラクターを作る際のデザイン技術を習得することができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・早い段階でポスター作り等にとりかかり、使う練習をする。練習時間を増やす。 ・キャラクターは今回の展示に合っていて良かったと思う。
③ポスターの掲示やFaceBookで告知した。	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し早い段階で広範囲(長浜付近など)にポスター等で告知しに行けば良かった。 ・広範囲でなくても、狭い地域内で多く訪問しても良かった。 ・展示期間中も積極的に告知を続けても良かった。 ・早い段階でFaceBookのページを作って宣伝できた(したかった)と思う。 ・もっと数多くの告知を早い段階でやり、人が多く集まる場所等への宣伝が重要。 ・来場者から、場所が分かりづらいので地図が欲しかった、市立図書館内の施設など、もっと人目につく場所でしたらいいと思うという声があった。
④他の班の人と協力した。	<ul style="list-style-type: none"> ・終盤だけでなく、早い段階から他の班と協力する。 ・それぞれの班が何を考えて、実際どう動いているのか把握しておくことで宣伝しやすくなると思う。 ・他の班の人がどのような内容を行っているのか情報交換が重要であり、そこから得られる情報もある。週2回くらいの情報交換が必要だと思う。 ・より早く他の班と協力することによって、もっと早く告知ができると思う。
⑤広報として展示のアピールをした。	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し早い段階で展示に関しての内容等を自分の中で固めて広報としてアピールすること。 ・等身大の模型や触れるジオラマ、ペーパークラフトの作成など具体的な展示物の内容も含めても良かったと思う。
⑥展示やアウトリーチプログラムにおいて視点の多様性を考えた。	<ul style="list-style-type: none"> ・見る側の人の視点になってもっと考える。 ・なかなか展示会が始まるまで見る側の人の視点は分からないので、調査員の方々の話などを参考にする。

人の役割が固定化し、完全ではないものの一定の解消をみた。また、こうした他者と自分との考え方を認識し、それを展示企画という一つの表現につなげていった事は社会における様々な案件を解決する上での能力育成にもなっている点は間違いない。

学芸員という専門性の高い職種の役割を理解した上で、より実習生一人一人の関与を高め、高次元での課題解決能力を習得していく事を一層目指していきたいと考えている。

参考文献

鶴崎秀樹・真鍋将一 2012 「宮崎海岸の侵食対策」に至るまでの経緯とその検討結果『九州技報』第51号 建設工法研究所
 ランドルフ・T・ヘスター、土肥真人 1997 『まちづくりの方法と技術－コミュニティー・デザイン・プライマー』現代企画室

表2 企画・展示（ジオラマ担当）班の自己評価

①ジオラマ	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な道具を使い、工夫して現物に近づけられた。 ・設計から完成まで改善を加えながらだが、良いものができた。
②企画案のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・各個人の意見から共通点を見つけ、まとめる。 ・他の人の意見と比べながら、自分の意見を述べた。（反論した） ・パネルを作る際にどんな内容にするか、皆の意見をまとめ、組み込めた。
③説明	<ul style="list-style-type: none"> ・卵の感触など自分が実際に調査した内容を詳しく説明することができた。 ・来場者にパネルの説明をして、昔の延岡の話を聞いた。
④ウミガメ調査	<ul style="list-style-type: none"> ・朝海に行って調査した時、実際に卵に触ることができた。 ・実際に海に行って調査員の人にインタビューしたり、カメの撮影をしたりした。

何を行えたか	より以上に何を目標せるか
①ジオラマを作る技術を得た。	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に触ってもらいたいものだけ触れるようにする。 ・ジオラマに気づかない人、触らずに見るだけの人が出ないよう展示の工夫があると良かった。
②意見の集約をはかり、まとめられた。	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと多くの意見を引き出す。 ・もっと多くの意見を出すとともに、内容のいいものも出すことにより良くなる。
③展示物を元にしてコミュニケーションをはかることができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の日が進むにつれ展示資料が増えていった。教えてもらったことを取り入れていったのが良かったと思う。 ・資料が増えてもすぐに対応したことが良かったと思う。 ・教えてもらったことをより多くの人に伝える。 ・様々な年代の人に合った言葉使いなどで、分かりやすく伝えるようにする。
④調査を行ってカメ以外のことも知ることができた	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を収集した上で、調査するべき。 ・カメについての情報を企画班だけでなく、他の班も積極的に知るべきだった。 ・カメについての情報を他の班の人達と知識の共有や情報交換する。 ・もっと早い段階から情報収集をし、調査期間を長くすれば良かったと思う。 ・基礎的知識も十分に得られていなかったなので、自分なりに一から勉強していたら良かった。

表3 企画・展示(パネル担当) 班の自己評価

①調査時	<ul style="list-style-type: none"> ・調査の段階で関わった人達の思いを得ることができた。 ・調査の時に、様々な分野でアカウミガメに関わっている方々の貴重な話を聞くことができた。
②企画を考える時	<ul style="list-style-type: none"> ・周りの意見も踏まえながら案を出していった。 ・周りの意見と反対意見(異なる意見)を述べることができた。
③展示	<ul style="list-style-type: none"> ・来場者により理解してもらえよう、タイミングをみて説明を行った。 ・来場者により展示の意図が伝わるように説明が行えた。 ・調査員の方々の話を聞き、来場者に調査員の方々の思いを伝えることができた。
④ジオラマ作製時	<ul style="list-style-type: none"> ・ジオラマ作製時において、卵の感触や土の中に入っている状態を途中までだったが再現できた。
⑤パネル作製時	<ul style="list-style-type: none"> ・パネル作製時に、わかりやすいような絵や文章をうまく表現することができた。

何を行えたか	より以上に何を目標せるか
①・砂浜の現状を知ることができた。 ・アカウミガメを知った。 ・アカウミガメに関わっている方々の思いを聞くことができた。 ・卵の感触を味わえた。	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちが保全を促す。 ・保全活動に参加する。 ・保全をすることの良い点、逆に悪い点に関しても伝えた方がいいと思う。 ・延岡のアカウミガメをもっと推す。
②・自分の意見を言えた。 ・他の意見と組み込み、まとめることができた。 ・協調性を持つことと自己の意見をおさえること。 ・多数意見にも負けなかった。	<ul style="list-style-type: none"> ・発想力と我慢 ・我慢するのではなく、自分の意見を押し付けないような言い方で意見を述べた方がいいと思う。 ・発想を我慢して言わなかったら、良い発想でも伝わらないので相手に伝えた方がいい。 ・意見を飲み込んでしまうだけでは、自分のやりたいこと、アイディアを活かせないので、相手の意見を聞き、自分の意見も出すことが大事だと思う。 ・他者を肯定しつつ、自分の意見を述べる。バランスが難しいが、自分の意見は大事にしたいと思う。
③来場者の様子を見ながら説明が行えた。	<ul style="list-style-type: none"> ・より伝わりやすいモノをつくる。 ・一人で展示を見たい人、説明してもらいながら見たい人の両者を考慮に入れて対応できた。 ・モノと一緒に伝えることによって展示の内容が分かりやすくなる。また、説明についても内容がどれだけわかりやすいかが重要。 ・進路とは逆に展示を見て不満を言う人がいたが、その不満に対して感謝の意を伝えることができたので良かった。
④ジオラマの修復や、模型を再現できた。	<ul style="list-style-type: none"> ・保存技術を身につける。 ・卵のジオラマは本物に似せた柔らかさを工夫して作ってあって良かった。
⑤パネルを工夫して作った。	<ul style="list-style-type: none"> ・情報内容の有無の決断判断を身につける。 ・来場者の目線に立って全体を見てみると良いと思う。 ・子供を対象に作ったので、大人からは少し内容の軽さの指摘があった。様々な世代が楽しく学べると良かった。 ・パネルやその他展示物を置く位置をもっと工夫して(来場者の視点に立って)展示出来たと思う。

謝辞

本企画の実施には、延岡市教育委員会文化課、延岡市野生生物研究会、延岡市民協働まちづくりセンター、宮崎県県土整備部延岡土木事務所、また多くの個人から多大なご協力を得た。

さらに緒方泉先生(九州産業大学)からは、会期中にご指導を頂いた。ここに御礼を申し上げる。

表4 教育普及班の自己評価

①役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居においてストーリーの考案 ・ペーパークラフトの担当し、パネル作成や、来場者がどうしたら楽しんでもらえるかを考えた。 ・作業班でワークショップで行う紙芝居の色塗りをした。
①＋②	<ul style="list-style-type: none"> ・準備段階において、役割分担を行うことで効率が上がった。
②作業の効率化	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居において、リハーサルを行うことによってより良いものになった。13日、20日と2回やったことで13日より20日はいいものになった。
③積極的な発言	<ul style="list-style-type: none"> ・企画発案の際、積極的に意見を出すことができた。 ・企画立案においていろいろ発言した。 ・計画段階で自分のアイディアをできるだけ積極的に発表できた。
④臨機応変	<ul style="list-style-type: none"> ・展示開始直前、ギリギリになってパネル作成。 ・企画当日の流れ
⑤コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・子供やお年寄りへの対応が分かるようになった。 ・企画展示中、ワークショップ中での来場者の対応。相手の様子を見ながら解説したり、アドバイスしたりしながら交流を試みた。 ・アウトリーチの企画においてうまくコミュニケーションをとることができた。 ・土々呂においてお年寄りとのコミュニケーションが難しかったが、友達になれた。 ・ペーパークラフトと海のものづくりにおいて人との交流(主に会話)
⑤＋⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・紙芝居で途中に問いかけを入れたことで子供が飽きるのを防ぐことができた。 ・貝の同定において、さまざまな貝を知り、交流できた。 ・展示会場で来館者と知識を教えあうことによって自分の知らないところまで知ることができた。
⑥知識	<ul style="list-style-type: none"> ・貝殻を拾ったり、もらったりすることで知識が増えた。

何を行えたか	より以上を目指すには
①役割分担ができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・よりその人に合った役割分担 ・適切さも考慮しつつ、今はまだできないこと、取り組んだことがない分野にも挑戦すると、できるようになる事が増えていくと思う。 ・合う仕事だけでなく、合わない仕事に対しても努力する姿勢で行うと良いと思う。 ・それぞれの人の個性や得意なものを活かして、役割を果たせたと思う。
②作業の効率化ができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・先を見越して、より作業の効率化をはかる。 ・先を見越すのと同時に、今の段階で自分たちがどこまで出来るのかの確認をする。 ・一度、シュミレーションをする。
③積極的な発言ができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的かつ、より中身のある発言をする。 ・積極的に発言できた人とちょっと消極的だった人の差もあったと思う。 ・一つ意見を出すとそれに流される場合があったので、様々な視点の考えを言うことも大切だと思う。
④臨機応変な対応ができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・より事前準備を完璧にすることと、問題を予測する。 ・問題を予測して、柔軟な対応をすることができていたと思う。
⑤様々な人とコミュニケーションができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・より思いやりがあり、年齢に合わせたコミュニケーション。 ・様々な年代の方と話す機会が必要だと感じた。 ・子供に対しての接し方をもう少し勉強していたら良かったと思う。
⑥様々な知識を得ることができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が得た知識をより多くの人に広める(伝える)。 ・自分が得た知識を分かりやすくし、伝えることができていたと思う。



産卵を終え、日向灘に戻っていく。

(撮影：濱田 奈津美)